

【研究ノート】

岐阜大学初代学長青木文一郎の経歴

廣内 大輔

岐阜大学教育推進・学生支援機構

岐阜大学地域協学センター

要旨

国立公文書館が公開した青木文一郎の履歴書を掲載する。併せて、先行研究が明らかにしてきた青木の大学入学以前の経歴について紹介する。以上により、青木の生涯を理解するための基礎資料とする。

キーワード：青木文一郎，岐阜大学，初代学長，岐阜市日置江，台北帝国大学

1. 国立公文書館が公開した青木の履歴書

平成 30 年 4 月，国立公文書館において岐阜大学初代学長青木文一郎の履歴書が公開された¹。青木は昭和 24 年に岐阜大学初代学長に就任し，昭和 29 年 7 月 1 日に在職のまま死亡している。このたび開示された履歴書を含む文書は，名称を「文部教官青木文一郎叙位の件」といい『叙位・巻 5・7 月・昭和 29 年』と題した簿冊に収められている²。同文書は，青木の死亡後，上級の位階を求める際の資料として作成されたものとみられる。文部大臣大達茂雄から内閣総理大臣吉田茂宛に発せられた請求文書の日付は 7 月 3 日，吉田以下国務大臣の花押が並ぶ起案文書の日付は 7 月 5 日，吉田が昭和天皇に上奏したのが翌 6 日となっている。これに裁可が下りたことで青木は死亡日に遡って従三位に叙された。なお，同月 8 日には天皇から祭綵料を下賜されている³。

今回紹介する履歴書には本籍地および住所が記載されているが，本稿ではそれら以外の内容を掲載する。見易さを考慮して筆者が，縦書きを横書きに，漢数字をアラビア数字に直し，年月日の表記を改めるなど軽微な変更⁴を行ったほかは原史料を尊重している。とりわけ右側の履歴事項については原文を逐語，筆写した。まずはこの履歴書を表 1 として示す。

岐阜大学初代学長青木文一郎の経歴

表 1 国立公文書館所蔵の履歴書

年 月 日	履 歴 事 項
明治 40 年 7 月 1 日	東京帝国大学理科大学動物学科ニ入学
明治 43 年 7 月 11 日	東京帝国大学理科大学動物学科卒業
明治 43 年 7 月 11 日	東京帝国大学大学院ニ入学
明治 44 年 7 月 11 日	大学院在学一ヶ年延期
大正 2 年 1 月 20 日	任九州帝国大学助手 給五級俸 解剖学教室勤務ヲ命ス
大正 4 年 5 月 5 日	依願免本官
大正 9 年 8 月 14 日	高等学校教員規程才一条ニ依リ教員免許状下附
大正 9 年 9 月 1 日	公立大学予科教授ニ任ス 高等官七等ヲ以テ待遇セラル 愛知医科大学予科教授ニ補ス 六級俸下賜
大正 11 年 7 月 31 日	五級俸下賜
大正 11 年 8 月 21 日	叙従七位
大正 11 年 11 月 8 日	講師ヲ嘱託ス 年手当五百五十円給与
大正 11 年 12 月 9 日	陞シテ高等官六等ヲ以テ待遇セラル
大正 12 年 1 月 20 日	叙正七位
大正 12 年 3 月 31 日	講師嘱託ヲ解ク
大正 13 年 3 月 31 日	四級俸下賜
大正 14 年 6 月 10 日	陞シテ高等官五等ヲ以テ待遇セラル
大正 14 年 6 月 30 日	三級俸下賜
大正 14 年 7 月 15 日	叙従六位
昭和 2 年 4 月 5 日	任台湾総督府高等農林学校教授 叙高等官五等 四級俸下賜 台湾総督府在外研究員ヲ命ス 二箇年間英、仏、伊、米ノ四箇国ニ在留スベシ
昭和 2 年 5 月 9 日	名古屋市ニ滞在ヲ命ズ 自今内地滞在中加俸本俸ノ十分ノ三ヲ給ス
昭和 2 年 5 月 13 日	勅令才一一三号台湾総督府諸学校官制改正辞令ヲ用イズ台湾 総督府台北高等農林学校教授ニ同官等俸給ヲ以テ任ゼラル

昭和2年6月9日	神戸港解纜
昭和2年7月28日	英国倫敦到着
昭和4年3月29日	帰朝（横浜港）
昭和4年4月11日	任台北帝国大学教授 叙高等官五等
昭和4年5月12日	著任（渡台）
昭和4年12月24日	陞叙高等官四等
昭和5年2月1日	叙正六位
昭和7年12月26日	陞叙高等官三等
昭和8年2月1日	叙従五位
昭和8年10月5日	叙勲六等授瑞宝章
昭和9年2月8日	補理農学部長
昭和11年3月31日	解補理農学部長
昭和12年3月31日	陞叙高等官二等
昭和12年5月1日	叙正五位
昭和12年6月3日	叙勲五等授瑞宝章
昭和12年12月11日	叙勲四等授瑞宝章
昭和16年12月12日	叙勲三等授瑞宝章
昭和17年1月23日	台湾総督府情報委員部委員ヲ命ス
昭和17年3月31日	補理農学部長
昭和17年4月6日	陞叙高等官一等
昭和17年5月1日	叙従四位
昭和18年4月1日	理学部勤務ヲ命ス 動物学才ニ講座担任ヲ命ス 補理学部長
昭和19年5月6日	依頼免本官
昭和19年5月26日	講師ヲ囑託ス
昭和19年6月5日	叙正四位 特旨ヲ以テ位一級被進
昭和19年5月19日	南方大系編纂委員会才二部会長ヲ命ス
昭和19年11月6日	帝国大学令才十三条ニ依ル勅旨以テ台北帝国大学名誉教授ノ名称ヲ授ク
昭和19年12月31日	農学部家□□ ⁵ 生学ノ教授及実習ヲ囑託ス
昭和20年9年5日	陸軍臨時囑託ヲ免ス
昭和20年11月15日	国立台湾大学理学院ニ留用セラル

昭和 24 年 5 月 31 日	文部教官に任命する 一級に叙する 岐阜大学長に補する
昭和 25 年 5 月 15 日	人事院規則八一一の改正により官の級別廃止
昭和 29 年 7 月 1 日	死亡

以上が国立公文書館所蔵の履歴書に表れた青木の経歴である。明治 40 年に東京帝国大学に入学した時点から始まっており、それ以前の学歴などを知ることができない。そこで以下では、岐阜日日新聞社の道下淳⁶による調査や、岐阜大学の卒業生で郷土史に詳しい川並秀賢がまとめた書籍等の先行研究に依拠して、国立公文書館史料からは知ることのできない青木の足跡をまとめていく。

2. 先行研究が明らかにしてきた青木の経歴

青木は明治 16 年 8 月 16 日、青木貞治と「てい」の長男として岐阜県稲葉郡日置江村、現在の岐阜市日置江に生まれた。祖父は加納藩士の青木平弥、叔父は日置江村長を務めた青木東洋である。青木の生家は長良川の堤防沿いに今も残されており、その建物は結婚式場として現役である。

国立公文書館所蔵の履歴書が大学入学以後の事柄、すなわち青木が学問の道を志して以後のことに特化していることに対して、道下（1969）や川並（2006）は、大学進学までの歩みや家族のことについても紙幅を割いている。また、『人事興信録』も青木の情報を載せている。これらから、先に掲載した履歴書記載事項との重複を避けつつ表 2 を作成した。

表 2 国立公文書館の履歴書には表れていない青木のプロフィール

年 月 日	履 歴 事 項
明治 22 年 4 月	且格 ⁷ 小学校（岐阜市日置江）入学
明治 24 年 10 月	濃尾地震で自宅倒壊（左足負傷）
明治 29 年 4 月	岐阜尋常中学校入学
明治 35 年 4 月	美江寺観音（岐阜市）近辺に下宿
明治 36 年 4 月	第三高等学校入学
明治 45 年 7 月	東京帝国大学大学院卒業
大正 5 年 4 月	「りう」 ⁸ と結婚
大正 6 年 7 月	長女誕生
大正 8 年 1 月	二女誕生
大正 10 年 11 月	長男誕生
昭和 6 年 5 月	三女誕生

昭和 20 年 3 月	硫黄島にて長男戦死
昭和 21 年 12 月	台湾から引き揚げ
昭和 26 年頃以降	前立腺肥大症を患う
昭和 29 年 6 月	夫婦で文部省に挨拶に出向く

『人事興信録』，道下（1969），および川並（2006）等をもとに作成。

以上，先行研究による知見と，今回公開された履歴書とを併せ読むことで，青木の生涯の大筋を把握することが可能となった。

3. 青木と台湾と岐阜大学

青木は昭和初期からの 20 年近くを台湾の地で過ごしている。ここで，台湾とりわけ台北帝国大学と岐阜大学との繋がりを見ておくことにする。

台北帝国大学には，青木と同じく戦前から台湾に渡り，戦後は岐阜大学農学部教授・第 2 代学部長となった奥田彥，台北帝国大学第 3 代総長で，岐阜大学初代学長選考⁹に際しては青木と共に候補者として名前が上がっていた安藤正次，台北帝国大学助教授で，戦時中から岐阜師範学校教授・女子部長に転じ，戦後岐阜大学学芸学部教授となる福島重一，昭和初期に学生として台北帝国大学に学び，卒業後は同大学の教官となり，戦後は青木と同様，岐阜大学の学長（第 5 代）となった林金雄がいた。さらには岐阜大学農学部の教壇に立つことになる山田民雄も一時期同大学で教鞭を執っており，学生には，これものちに岐阜大学教官となる葛野浩がいた。

この点に関しては，台北帝国大学理農学部創立六十周年記念誌編集委員会編（1988）に収録されている葛野の回想録「獣医学科一回生の思い出」¹⁰が興味深い。同回想録によれば，葛野は台北帝国大学において，青木文一郎と山田民雄の授業を聞き，卒業証書を奥田彥から直接受け取っている。

ところで，以上述べた調査を以てしてなお不明な点も残る。それは戦後日本に引き揚げてきた後，岐阜大学の学長に就任するまでの間の青木の動きである。

青木は終戦後も台湾大学に留用されているが，その後の足取りについては青木自身が，学術雑誌『生物』の中でその一端を述べている（青木，1946）。この事実については近年，本川・于（2015）も指摘しているが，それでもなお，日本に帰国した後の暮らしについて記録したものは管見の限り存在せず，明らかでない。台湾からの引き揚げについて，前述の青木（1946）や本川・于（2015）によれば，昭和 21 年 12 月 18 日に台北を発ち，23 日に基隆から戦時中の駆逐艦「宵月」にて出港。沖縄を経て 26 日に長崎県の佐世保に到着。30 日の午後，同市南風崎駅発の引き揚げ列車に乗って翌 31 日の夜に京都入りしたとする。

この時，京都にどのような伝手があったのかは定かでない。その先，京都でどのような生活を送ろうと計画していたのかも分からない。ただ，昭和 24 年 5 月当時の京都での居所に

ついて、昭和 24 年 5 月 25 日付『岐阜大学芸新聞』には、京都市上京区紫竹下本町¹¹とあるため、岐阜大学の初代学長になる直前まで京都のこの地にいた可能性がある。そしておそらくは、学長に就任した後に日置江の生家に移り住んだのであろう。本研究で参考文献として用いた『日置江の歴史』の編者、川並秀賢は、岐阜市日置江の生まれであり、かつ岐阜大学の卒業生であるが、筆者に対し、昭和 29 年 4 月に岐阜大学に入学するにあたり父とともに日置江の青木邸を訪ねて挨拶したと証言する。

4. 今後の課題

以上が今回の調査から判明した岐阜大学初代学長青木文一郎の経歴の一部である。このたびの研究では主に、学長職に通じる大学教官としてのキャリアに着目しており、動物学者としての青木の実像に迫ることはできていない。動物学者としての青木については、本川・于(2015)による精力的な研究があるが、それによると、台湾大学には現在も青木が蒐集した標本が残されているほか、青木の蔵書なども「青木文庫」として保管されているという。今後は、台湾大学への訪問調査も視野に入れながら、青木の足跡についてさらに研究を進めていく予定である。

【注】

- 1) この文書は国立公文書館において「要審査」扱いとして非公開であったが、このたび筆者が利用審査請求を行った結果、開示されたものである。
- 2) 簿冊の請求番号は「平 1 総 00329100」であり、その内の件名番号「014」が当該文書である。
- 3) 朝日新聞、昭和 29 年 7 月 8 日付夕刊、第 3 面。
- 4) 例えば「明治四〇、七、一」とあるところを「明治 40 年 7 月 1 日」とし、連続する同じ元号を「〃」で略することなく逐一記載することとした。なお、現物には其々の履歴事項について発令庁を記した欄があるが本稿では割愛している。
- 5) □□は判読困難。「蓄」と「胎」か。
- 6) 道下淳（じゅん）は筆名であり本名は道下亨（とおる）。この点については、紀伊国屋書店のウェブサイトを参照した（<https://www.kinokuniya.co.jp/f/dsg-01-9784877970505> 平成 30 年 11 月 9 日確認）。
- 7) 「しよかく」と読む。同校は現在も岐阜市日置江にある。
- 8) 柳子とも。明治 31 年 3 月生まれ。岐阜県本巣郡七郷村又丸（現在の岐阜市又丸）の大野幸一郎の四女。
- 9) 岐阜大学初代学長選考については、本年報に掲載の別稿「新制国立大学胎動期の学長選考：岐阜大学初代学長青木文一郎の事例」を参照されたい。

- 10) 台北帝国大学理農学部創立六十周年記念誌編集委員会編（1988），216-220 頁。
11) 同地は昭和 30 年以降，同市北区となっている。

【主要参考文献】

- ・青木文一郎（1946）「臺灣だより」『生物』第 1 巻，第 5 - 6 號（昭和 21 年 12 月），北方出版社，333-335 頁。
- ・株式会社人事興信所刊（1955）『人事興信録』（第 18 版）。
- ・佳山良正（1995）『台北帝大生戦中の日々』，築地書館。
- ・川並秀賢（2006）「（一）ネズミの研究に生涯を捧げた初代岐阜大学長青木文一郎（一八八三～一九五四）」，日置江の歴史編集委員会編『日置江の歴史』，岐阜市日置江自治会連合会，844-849 頁，および同書奥付。
- ・酒井哲哉・松田利彦編（2015）『帝国日本と植民地大学』，ゆまに書房。
- ・台北帝国大学理農学部創立六十周年記念誌編集委員会編（1988）『台北帝国大学理農学部創立六十年記念』，台北帝国大学理農学部創立六十周年記念誌編集委員会。
- ・帝國大學出身録編輯所編（1922）『帝國大學出身録』。
- ・福島重一（1947）『社会と人格』，全國書房。
- ・本川雅治・于宏燦（2015）「臺北帝国大学の動物学研究：青木文一郎と哺乳類標本」『タクサ：日本動物分類学会誌』第 39 巻，日本動物分類学会，25-39 頁。
- ・道下淳（道下亨）（1969）「青木文一郎：ネズミの研究に生涯をささげた」岐阜市教育委員会編『科学的研究により郷土の教育・産業に貢献した人びと：年譜』，17-21 頁。
- ・『岐大学芸新聞』（昭和 24 年 5 月 25 日付）（国立国会図書館憲政資料室プランゲ文庫所蔵）。
- ・「故青木岐阜大学長に祭葬料」『朝日新聞』（朝日新聞東京本社版，昭和 29 年 7 月 8 日付夕刊第 3 面）。
- ・「文部教官青木文一郎叙位の件」『叙位・巻 5・7 月・昭和 29 年』（国立公文書館所蔵）。

【謝辞】

本研究においては，岐阜大学卒業生である川並秀賢氏にご協力を頂いた。川並氏は，岐阜市日置江のご出身で昭和 29 年に岐阜大学学芸学部に入學されている。今回の調査では，生前の青木を訪ねた時の思い出や，昭和 20 年代末期から 30 年代前半にかけての岐阜大学の様子について，貴重なお話を聞かせてくださった。心より御礼申し上げたい。